

(写真中央) アトリエに並ぶ絵本のような作品。
(写真左下) 中には切手作品も展示されている。
(写真中央下) ボローニャ国際絵本原画展での受賞作品と
会場の様子。

世界に認められる銅版画家

大越順子

その個展と作品の魅力

来店するお客さん「人ひとりに大越さん自らが直接、銅版画の刷り方や作品について丁寧に説明してあげていた。また、座ってお茶を出来るスペースまで用意されている。会場は彼女の優しさで謙虚さにあふれていて、世界に認められていることについての傲りなど一切感じられない。結果とは人間性についてまわるものなのだろう。」

ほとんどの作品に登場する大きな熊。小さな梓にキョッと詰まっている、という印象を受ける。フランスでの個展の話など、ヨーロッパから活動のオフアークがきているが、基本的には日本で描いていきたいという彼女。作品には作者自身の人間性が投影されていくということを改めて強く感じた。(写真・文 みみみ)

「かわいいカメラですね。」
作品に夢中になっていた私の背中にやわらかい言葉がかけられる。振り返ると制作者の大越順子さん本人が立っていた。作品に描かれていた熊を見守る優しい女の子。その姿を思い浮かべた私は迷わずその場で取材を申し込んだ。

最初は音大でピアノを勉強していたという大越さん。子供に教えるという道に進もうとしたが、それよりも自分で「表現する」ことの方が性格に合っていると感じ、美術の専門学校へ入り直した。そこで銅版画の先生と出会いこの道を歩みだしたのだという。

「銅版画？」
あまり聞き慣れない単語に興味を惹かれて中に入ると、そこには絵本のような世界が広がっていた。作品はストーリーに合わせて展示され、大きな熊が緊張しながらも演奏会を成功させる様子がとても愛らしく描かれている。クラシックをやってきた私にとってその状況はとても共感できるものであり、なんとも言えない懐かしさに胸をつつまれた。

大越順子 銅版画展 『開演10分前』
「銅版画？」
あまり聞き慣れない単語に興味を惹かれて中に入ると、そこには絵本のような世界が広がっていた。作品はストーリーに合わせて展示され、大きな熊が緊張しながらも演奏会を成功させる様子がとても愛らしく描かれている。クラシックをやってきた私にとってその状況はとても共感できるものであり、なんとも言えない懐かしさに胸をつつまれた。

季節に合わせて、まるで別世界へといざなう道のように並木道が続く。一橋大学はそれ自身が芸術作品のようで、その周辺には個性溢れるお洒落な喫茶店が立ち並んでいる。

国立は西東京を代表する気品と情緒のあふれる街だ。そんな一角に佇むアトリエである個展が開かれていた。

大越順子 (おおごし じゅんこ)

大阪芸術大学 演劇学科ピアノ専攻卒業
大阪美術専門学校プリントメイキング専攻卒業

【受賞歴】
2013年 第33回カタクス国際ミニプリント展入選 (スペイン)
2016年 ボローニャ国際絵本原画展入選 (イタリア)

【個展】
2010年 『バスに乗って』 (大阪)
2014年 『tea time』 (大阪)
2015年 『Holiday』 (神戸)
2015年 『わたしの切手コレクション』 (大阪)
2016年 『はじめての演奏会』 (大阪)
2016年 『開演10分前』 (東京)